

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

# 島 嶼 研 だ よ り

No.68

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2014年10月

---

 主な記事

センター長就任にあたって (河合 溪)	p1
『歌い継ぐ奄美の島唄』の完成を喜ぶ (梁川英俊)	p2
フィールドこぼれ話「どうしてこうなるのか」 (大塚 靖)	P3
学生奮闘記「ゴカイっち知っとー？」 (坂口 建)	p4
連載 とうがらしに旅して 第九回 「ブートジョロキアはどこからきた？」 (山本宗立)	p10

---

## センター長就任にあたって

国際島嶼教育研究センター長 河合 溪

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター(島嶼研)は、平成22年4月に多島圏研究センターから改組され、鹿児島県島嶼からアジア太平洋島嶼部を対象に教育研究を行なっている組織です。その前身は昭和56年から7年間存続した南方海域研究センターで、その後昭和63年から10年間存続した南太平洋海域研究センター、そして平成10年から12年間存続した多島圏研究センターです。この島嶼研では、4名の専任教員、1名の外国人客員教員が3領域の学問領域を担当する一方で、学内共同利用施設という機能も持っており、60数名の兼務教員と協力し活動を行っています。

鹿児島大学は、本土最南端に位置する総合大学として、伝統的に南方地域に深い学問的関心を抱き続けてきており、多くの研究により成果あげてきました。そのような伝統を基に、島嶼研は鹿児島大学憲章に基づき、「鹿児島県島嶼域～アジア・太平洋島嶼域」における鹿児島

大学の教育および研究戦略のコアとしての役割を果たす施設とし、将来的には、国内外の教育・研究者が集結可能で情報発信力のある全国共同利用・共同研究施設としての発展を目指しています。

鹿児島県島嶼を含むアジア太平洋島嶼部では、現在、環境問題、環境保全、領土問題、持続的発展など多岐にわたる課題や問題が多く存在します。島嶼研は、このような問題にたいして、文理融合的かつ分野横断的なアプローチで教育・研究を推進していきます。

鹿児島県島嶼部における活動としては、平成23年度は、鹿児島大学連携の実績が豊富な与論島においてケーススタディとしてプロジェクト研究を推進しました。平成24年度は与論島との比較研究を継続しながら、これまでに得られた研究の成果をもとに、奄美群島からトカラ諸島や大隅諸島における研究をスタートしました。平成25年度は「島嶼地域資源の有効活

用と人々の生活向上一地域・学際比較研究による提言」を推進しました。平成 26 年度は、大隅諸島において文理融合・学際研究を行っています。これと同時に 10 月 4 日には種子島においてシンポジウム『島を結ぶ学びと連携—地元学と島嶼学の同時展開—』を開催し、島嶼とネットでつなぎ議論を進める予定にしています。そして、本年度の成果報告会を平成 27 年 2 月 16 日に行い、報告書の作成も行う予定です。これらの成果は、平成 25 年度に The Islands of Kagoshima として英語圏一般の方への本地域の解説書として出版しましたが、今後 The Amami Islands、The Ohsumi Islands、The Tokara Islands、The Kosiki Islands を継続して出版する予定にしています。また、島嶼の発展のため島嶼データベースも構築しています。

太平洋島嶼においては科学研究費を中心に外部資金を元に、ミクロネシアにおいては「ミクロネシア地域における自然・社会環境と人々の生活に関する調査」を、メラネシアにおいては「島嶼沿岸域における生態系サービスと人間活動の相互関係に関する学融的研究」、東南ア

ジアにおいては「インドネシアにおけるトウガラシ属の資源植物学的研究」の各プロジェクトを推進しています。

教育面では大学院前期課程を対象に鹿児島大学大学院全学横断型教育プログラム「島嶼学教育コース」を創設し、コア科目である「島嶼学概論 I・II」を担当し、中之島や硫黄島において実習を行っています。また、共通教育においても科目を担当し、教育を担当しています。

今後は、鹿児島県から太平洋まで連続する島嶼地域の自立的で豊かな発展のために、学内外の様々な分野の関係者と連携し教育・研究とともに地域貢献を推進する予定です。それらの成果を積み上げ、有機的結合を図り、外部資金の獲得や大型のプロジェクトへの発展につなげ生きたいと考えています(平成 27 年度は科研 A に申請予定)。特に日本国内においては、来年度に設立当初からの構想である奄美大島に奄美フィールド拠点を設置し、研究・教育を推進するとともに、大学と地元との窓口になるべく活動の幅を広げていく予定です。

---

## 『歌い継ぐ奄美の島唄』の完成を喜ぶ

鹿児島大学法文学部 梁川英俊

---

鹿児島県が 2011 年から 3 年間に渡って進めてきた「奄美島唄保存伝承事業」の成果として、2014 年 3 月、CD 集『歌い継ぐ奄美の島唄』が完成した。CD にして 29 枚、収録された歌は 482 曲(うち 168 曲がこの事業のための新録音)、唄者の数は 287 人というから壮観である。奄美の民謡と言え、島唄の他に八月踊り唄のような行事唄があるが、この事業では収集対象を三味線が伴奏するいわゆる島唄に限り、八月踊りや諸鈍シバヤ、夏目踊りや十五夜踊りなど各島の代表的な行事に関しては、付録の DVD に映像を収録している。CD 集は、大島のみが北部と南部に各一卷、喜界島、徳之島、沖永良部島、

与論島に各一卷が充てられ、各巻に曲目解説と歌詞、さらには唄者のプロフィールなどを掲載した解説書が付くという大変に行き届いたものである。

実はこの事業は、島嶼研とも少なからぬ縁がある。数年前に島嶼研では、奄美群島の各家庭に残っている(はずの)島唄が録音されたオープンリールやカセットテープを集めようと計画したことがある。再生装置の寿命が尽きてテープ類が廃棄処分になる前に、各島の歌の記録を残したいと考えてのことであったが、収集の困難さに加えて著作権やプライバシーの問題もあり、計画はほとんど具体化されぬまま自然

消滅してしまった。

その過程で親身に相談に乗って下さったのが、鹿児島純心女子短大元教授で島唄研究家の小川学夫氏である。小川氏はその後この保存伝承事業の実行委員会のメンバーとなり、推進役の一人として事業に携わってこられた。その間、幾度かお会いして話を伺う機会があったが、保存事業の中では島嶼研が計画していた過去のテープの発掘もぜひやりたいとおっしゃっていた。

嬉しいことに、完成したCD集には、かなりの数のオープンリールやカセットからの録音が含まれている。なかでも数が多いのは喜界島だが、過去の歌の実態が分かりにくい地域であっただけに、これは大変にありがたい。CD集にはまた、親子ラジオやケーブルテレビ、小川氏自身の個人的な録音から採られた歌もある。

その他の録音も大変に充実していて、なかでも大島の森チエさんや、沖永良部島の撰ヨ子さんから高齢の唄者の元気な声が聴けるのは嬉しい。従来、大島に片寄りがちであった奄美民謡の録音だが、このように全島の民謡に容易にアクセスできるようになった便利さは計り知れない。島唄にはセントラル楽器を中心にすでに商業録音も数多くあるが、多様な音源を元に歌の集成を完成した意義は大きく、その価値はおそらく十年後二十年後に再認識されるに相違ない。

なお、この『歌い継ぐ奄美の島唄』は、奄美群島外では県立図書館等のわずかな施設にしか配架されない貴重な資料とのことである。幸い小川氏のご厚意により、私の研究室にも一セットいただいた。閲覧、貸し出しも行っているため、希望する方は申し出てください。

## ～フィールドごぼれ話～

「どうしてこうなるのか」

大塚 靖（国際島嶼教育研究センター）

研究をしていると一緒に共同研究をしませんかと声をかけてくれることがある。いい話ばかりではないのだが、中にはとても興味深い提案をしてくれることがある。私はブユや蚊などの衛生動物が専門なのだが、北アルプスのライチョウに感染するロイコチトゾーンという原虫をブユが媒介するらしく、そのブユの調査を一緒にしませんかというのだ。これは楽しそうだと思い、電車を乗り継ぎ長野県の白馬に行った。採集地の梅池は6月でもまだ雪が多く残っていた。みんなで夕食を食べている時に、「折角ここまで来たのだからライチョウを見ていきましょう」となった。さらに「じゃあヘリコプターを出しましょう」という予定外の展開になる。翌朝、ヘリコプターで連れていかれた先は、まさに雪山だった。私は春の野山でブユ採集をする格好である。同行した先生が笑顔で袋からアイゼンを出してきた。慣れない雪道を歩き、尾根沿いにさらに歩いて行くとその先にライチョウがいた。かなり近づいても逃げない。こんなところにもブユが吸血にくるんだと変な感心をしてしまった。その後、雪道にも少し慣れてきて、乗鞍岳をまわって戻ることになった。どうにか、宿泊所まであと少しのところ、油断したのか、足を踏み外し30mほど斜面を滑り落ちた。落ちた先がなだらかな場所だったのでどうにか止まってくれた。「滑ったときは、スティックを雪面に刺してブレーキにすると止まりますよ」とその先生は言うてくれたが、もう少し早く教えて欲しかった。雪山でのライチョウ見学は思わぬ展開であったが、その後のブユの調査はうまくいき、高地でも多くの種類が分布することがわかり興味深い結果となった。研究では予想を裏切る展開が面白いが、それ以外でどうしてこうなるのかという展開はほどほどがよい。

## 学生奮闘記

### ゴカイっち知っとー？

坂口 建（鹿児島大学理工学研究科）

私はゴカイの研究をしている。この言葉を初対面の人に言うとじつに様々な反応が返ってくる。「あの釣りで使うやつ？」「夜になると泳いでいるよね」というマニアックな意見はさておき、「気持ち悪い！」「そんなの研究して何がおもしろいの？」ということをよく言われる。かくいう僕もゴカイの研究を始める前までは後者に属していた。しかし、研究を始めて早一年、その心境に変化が現れたので今回紹介したい。

まず、ゴカイとはなにか？一般に言われるゴカイとは、主に海に生息しているミミズに似た生き物のことだ。単にゴカイと言っても、ウロコを持つもの、海中で花のようなエラを広げるもの、体長が3mのものなど様々だ。

その中で私は、釣りのエサとしてよく使われるゴカイについて、南日本における分布を調べている。それらは潮の満ち引きがあるところの石の下に生息している。そのような研究なのでフィールドに出ることが多く、これまで自分が行ったことのないような地へ調査に行くこともしばしばである。

バケツとスコップを持って、砂浜や磯などを歩き回って調査をしていると、よく地元の方に話しかけられる。「なんしょと？」「ゴカイを取ってます」「そげな取ってどうするん？よく誤解されん？(笑)」「. . . (困)」のような会話はよくある。そんなこともあって一時期は地元の人に聞かれても、海藻や生き物を取ってます、とゴカイを研究していることを伏せていたこともあった。しかし喜界島での調査の折、研究を地元の方に言うと「ゴカイ？あぁ、〇〇の磯で今も取ってる人おるから紹介するよ」と私はその方からゴカイの地方名や地元流の採集の仕方などを聞くことができた。

ゴカイの研究をしていると言うと、引かれたり、ギャグ言われたりして面倒くさいこともある。しかし、それを引け目に感じて研究を伏せてしまうと情報が入ってこない。結局、自分の研究に自信を持つことが大事なんだと感じ、最近では自分から地元の人に話しかけるようにしている。



図1 多様なすがたのゴカイ



図2 地元の人とゴカイ採集

## 鹿児島大学シンポジウム 「島を結ぶ学びと連携—地元学と島嶼学の同時展開—」

平成 26 年 10 月 4 日（土）に学長裁量経費島嶼研究コアプロジェクト主催、中種子町・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター共催で鹿児島大学シンポジウム『島を結ぶ学びと連携—地元学と島嶼学の同時展開—』が開催されました。当日は多数の方に御参加いただき、盛会となりました。

### 基調講演

#### 薩南諸島で考える海上の道

石井正己

（東京学芸大学）

柳田国男は『海上の道』（1961 年）を著し、自分の経験と豊富な知識を総合して、日本民族の起源を考えた。その際、奄美大島はともかく、薩南諸島が十分に意識されたとは言いがたい。だが、この一列に並ぶ島々は、沖縄と九州を結ぶ「道の島」としての役割を担ってきた。南の文化と北の文化の中継地であったことが、近年の研究から明らかになっている。一方で、柳田国男は沖縄を考える際に孤島苦を憂い、『島の人生』（1951 年）を著した。情報化社会と国際化が急速に進む時代にあって、島に生きることの誇りを考えてみたい。一例をあげれば、屋久



石井正己先生

島の世界遺産と種子島の宇宙センターが隣接してある。それは自然と科学、過去と未来の共存を考える契機になるはずである。

### 報告

#### 1) 海洋学校などの取り組み

久米満晴

（NPO タートルクルー）

私たちは「ひとも海亀も自然の一部」を合言葉に、北太平洋の中で有数のアカウミガメ産卵地である種子島において、海亀を通じて自然の大切さ厳しさ楽しさを伝えていく自然啓蒙活動を行なっています。種子島は他の離島に漏れず、若者の流出という過疎化問題を抱えており、島の自然の素晴らしさを感じずに島を去る若者があまりにも多い事が懸念されています。また、人と自然との共存を考えると、自然を大切に思う気持ちを育む事が大切と考え、それには自然に接する機会を増やすことが一番の近道という思いからヨット等を用いた海洋体感活動も行っています。ここ南薩地方から世界へ、海亀をテーマに自然共生交流を行うことを目標としています。

#### 2) 農による地域づくりと発信

遠藤裕未

（なかわり生姜山農園）

西之表市で唯一廃校となってしまった中割校区鴻峰小学校を拠点に、この小学校がある生姜山集落という名前の由来でもあり、かつ「健康野菜」として有名な「生姜」の栽培と商品化を通して、過疎高齢地域の活性化に取り組んでいます。中心メンバーが高齢で人数も少ないため、市街地から「農園サポーター」を募り、農作業に協力してもらおうところからスタートし

ました。また、都市部との繋がりを持つために、生姜のオーナー制度「マイジンジャープロジェクト」を実施し、単なる「消費者」でない関わり方を持ってもらうことで、活動自体を応援してもらえる仕組みを作っています。

### 3) 種の多様性保全活動

手塚賢至

(屋久島生物多様性保全協議会)

種子島、屋久島、口永良部島の三島に自生する絶滅危惧植物二種の保全活動を通して豊かな自然環境を大切に守り、後世に伝えることの意味について考えます。ヤクタネゴヨウは屋久島と種子島にしか生えていない固有の五葉松です。屋久島には世界自然遺産地域内を中心に約 2000 本、種子島には約 300 本が残存していますが種子島では松枯れ病の影響で生存本数が減少しています。タカツルランは国内では三島が北限の熱帯性の無葉ランです。スダジイやタブが生える照葉樹林の中でも特に原生的な森林の中で菌類とともに共生しています。このランが生き永らえる何世代もの命が繋がる古い照葉樹林は種子島、屋久島では様々な開発のために残り少なくなり今やタカツルランは風前の灯です。熊毛地域に特有の貴重な生き物たちの多様性と豊かな自然環境の中で育まれる文化の多様性を新たな「地域の学び」として結びあえることを願っています。



手塚賢至先生

### 4) 地域案内ビジネス

貴船恭子

(口永良部)

口永良部島は、屋久島の北西約 12km に位置するひょうたん形をした小さな島です。8 月 3 日に 34 年ぶりに噴火したのをニュースでご覧になった方も多いかと思いますが、記録に残っている限りでも幾度となく噴火が繰り返されている活火山の島でもあります。また、平成 19 年には全島が屋久島国立公園に指定され、自然環境保全と観光利用の両立を目指しています。この口永良部島で取り組んでいる新しい観光の形として“里のエコツアー”の紹介と“里のエコツアー”を通じて得られた島の変化について、さらにそこから口永良部島が抱える大きな課題である人口問題に対し、今出来る事は何かを考察します。

### 5) 観光と文化人類学

桑原季雄

(鹿児島大学法文学部)

鹿児島県本土の南の海上には三島（竹島、薩摩硫黄島、黒島）、大隅諸島（種子島・屋久島・口永良部島）、トカラ列島（口之島、中之島、諏訪瀬島、平島、悪石島、小宝島、宝島）、奄美群島（奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島）など、21 の有人島が南北 500 キロの海上に連なる。では、これらの島々はこれまで、相互にどのような関係を取り結んできたのだろうか。本発表では、島嶼学と観光人類学の観点から、まず最初に、全国一の島嶼県である鹿児島県の薩南諸島の島々で展開されている観光化の現状を大まかに概観し、次に、観光の視点でみた各島々の間の繋がりについて見ていく。そして最後に、種子島と屋久島の観光を鹿児島県島嶼の観光全体に位置づけて比較考察し、その特徴や今後の展望について述べてみたい。

## 6) 島々を繋ぐ展開と情報工学

升屋正人

(鹿児島大学学術情報基盤センター)

鹿児島島の島々においても情報通信基盤の整備が進み、今や高速回線でインターネットにつながらない離島は存在しないとされている。ところが、島ごとに情報通信環境は大きく異なり、実際には、その格差は整備前に増して拡大してきている。また、生活に関わるさまざまなものが情報通信基盤と密接に関わるようになり、つながりが途絶えると日常生活が多大な影響を受けるようになってきた。その一方で、情報通信基盤は島々を距離の制約から解き放ち、その利活用はさまざまな新たな展開をもたらすものでもある。これらを踏まえて、鹿児島島の島々

がどのようにつながっているかを概観し、現状と問題点を考察するとともに、つながりを活かした島々の将来を展望する。



総合討論

## 国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第148回 2014年4月21日

南西諸島における近世陶磁器の流通

—三島・十島における考古学的踏査から—

渡辺芳郎

(鹿児島大学法文学部)

報告者は南西諸島における近世陶磁器の流通に関心を持っている。しかし三島・十島（トカラ列島）の考古学的情報はきわめて少ない。そこで基礎資料の蓄積を目的に、2012・2013年に考古学的踏査を実施した。その結果、三島・十島の近世陶磁器の流通は、鹿児島本土域と共通する点もある一方、とくに十島においては中国磁器の分布が密であったことから、沖縄との密接な関係が想定できる。また明治時代の文献などを手がかりに流通形態を推定した。三島・十島では、別の目的で鹿児島や奄美・沖縄に渡航した際に陶磁器もあわせて入手したと想定できる。また日用品以外に、神社への奉納品と

しても陶磁器が島に持ち込まれた可能性が指摘できた。

第149回 2014年5月26日

衛生昆虫・寄生虫の種分化に関連する研究について

大塚 靖

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

衛生昆虫・寄生虫の研究において種の同定は大変重要な部分である。近年、塩基配列を用いた分類が行われるようになり、これまで知られていた種の中に隠蔽種 *cryptic species* の存在が明らかになってきている。その例としてタイのマラリア媒介蚊の一種である *Anopheles barbirostris* 種グループは塩基配列や染色体や交配実験などで5種に分けられるがわかったが、実際にはそのうちの一種のみがマラリアを媒

介していると思われる。また、日本で初めて見つけた人獣共通オンコセルカ症はイノシシに寄生する *Onchocerca dewittei japonica* が起因種であるが、日本のイノシシには形態の大変似ているもう一種が存在していることが明らかになり、そちらの病気との関連も疑われることとなった。このような研究が今後どのように展開していくのかを考えていく。

第 150 回 2014 年 6 月 30 日

シーカヤックで観たルソン島東岸の漁村

山岡耕作

(高知大学名誉教授)

黒潮は日本に多くの恵みをもたらす。その下流域に位置する我が国では、黒潮に関する自然科学、人文社会科学的な研究はかなり行われてきたが、源流域であるルソン島東海岸ではほとんど研究はなされていない。新たな学問分野である「黒潮圏科学」を創り上げる為には、黒潮上流域の情報を集めることが必要だが、道路のないところも多く、アクセスすることが困難であった。その時、シーカヤックが持つ移動手段としての能力を知ることとなり、2010 から 2012 年度の三年に渡り、石垣島在住の海洋冒険家八幡暁氏と共に、約千キロにわたってルソン島東海岸の漁村を訪問する機会を得た。出発地はルソン島南東部アルバイ県タバコ市、最終到着地は島北東端のカガヤン県サンターナ。各漁村では漁業や生活について聞き取りを行った。その結果について報告すると同時に、シーカヤックの持つ野外調査ツールとしての可能性について考えたい。

第 151 回 2014 年 7 月 14 日

100 歳と長寿の文化人類学 —沖縄・済州島他諸外国 470 人インタビュー—

全 京秀

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

百歳人の特性は、民族誌作成のフィールドワークの中で個人的な面談を通じて明かされるさまざまな範疇についての記憶、仕事および労働倫理、人生についての態度そして、食べ物のような範疇を通して帰納的に理解されるものである。彼らの家族構成員および友達と関連した意識に関する記憶は彼らの社会的ネットワークとの関係を表している。一部の記憶はとても古くなり民族誌的面談の間に思い起こすことが難しい場合もあった。また、一部の百歳人は不幸な記憶を話したがらなかった。このような場合には大概、口数少ない面談に終わったため研究者は正確な内容を聞くことができず、その結果百歳人は社会的人生としてだけでなく研究対象としても無視される傾向がある。

老年学者が使用する日常の暮らしに関する調査活動のような構造的なアンケートは百歳人の研究に使用することができない。民族誌的な研究は百歳人の身体的反応と記憶回想力と関連したゆっくりとした精神的な過程を調整しながら待つ時間と忍耐力を必要とする。このような状況がまた、百歳人の研究を天佑神助的なものにするのである。

フィンランド、サルデーニャ、ウェスカおよび沖縄の多くの百歳人は病院で寝たきりの生活を送っている。ウイグルと済州島では、彼らの大部分は家で家族と共に生活しており、一部の百歳人はまだ畑で仕事をしたりもする。寝たきりで生活する多くの百歳人が人間化石になっていくことは事実だが、皆が皆そうであるわけではない。18 世紀の済州島の牧使は王に「80 代と 90 代の人々は幸せの象徴である。百歳人は国家にとっての非常に重要な象徴である」と報告した。百歳人は化石ではなく社会の宝石と見なされていたのである。未来の「年齢地震 (agequake)」に順応する長寿文化を過去の社会で老人を遇してきて伝統的な脈絡に基づいて再発明されなければならないのではないだろうか。



第 152 回 2014 年 9 月 11 日  
鹿児島における救急医療の現状と未来像  
—鹿児島大学病院救命救急センターと離  
島へき地のコラボ—

垣花泰之  
(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科)

医療分野における「へき地」とは「交通条件及び自然的、経済的、社会的条件に恵まれない山間地、離島その他の地域のうち、医療の確保が困難である地域をいい、無医地区、無医地区に準じる地区、へき地診療所が開設されている地区等が含まれる。」と定義されています。鹿児島県には、無医地区が 16 地区（うち離島は 4

地区）、準無医地区が 37 地区（うち離島は 33 地区）あり、離島・へき地にみられる医師不足・救急医療体制の不備などが深刻な問題として指摘されています。県内のどこに住んでいても、医療ニーズに応じて、いつでも、どこでも安心・安全で質の高い医療サービスを受けられるようにすべきです。その実現に向けて、鹿児島県の離島・へき地における医師供給システム、医師研修システム、傷病者搬送システムをどのように構築していくのが重要です。鹿児島大学病院救命救急センターがその問題に対してどのような役割を担っていくのかに関して考えたいと思います。

---

## お知らせ

---

### (1) 着任

平成 26 年度 4 月 1 日付で大塚靖氏が准教授として着任しました。研究テーマは「衛生昆虫とその媒介する感染症の種分化」で、専門は衛生昆虫学、寄生虫学です。また、外国人客員教授としてソウル大学の全京秀氏が着任いたしました。招聘期間は平成 26 年 6 月 2 日～10 月 30 日までです。研究テーマは「黒潮文化再考：生物文化的視点」、専門は文化人類学です。

### (2) センター訪問者

平成 26 年度 6 月 1 日にマレーシアサバ大学の Mohd Harun Abdullah 大学長と Charles S. Viarappan 准教授がセンターを訪れました。河合センター長が島嶼研を紹介し、サバ大学に新しく設立予定の島嶼に関する研究所との今後の研究協力に関して意見を交換しました。平成 26 年 7 月 4 日にボゴール農科大学の Luky Adrianto 博士がセンターを訪れ、今後の研究協力に関して意見を交換しました。

---

## 最近の出版物

---

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.35, No.1, 2014

### Research Papers

FUKUGASAKO K.: “Communalization of Tombs” in Uken Village, Amami Ōshima (Island), Kagoshima Prefecture: A Case of the Establishment of Taken “Shōrōden”

MANUS P. and SINGAS S.: Determinants of Adoption of Pond Fish Farming Innovations in Salamaua of Morobe Province in Papua New Guinea

「とうがらしに旅して」

第九回 「ブートジョロキアはどこからきた？」

ブートジョロキアを御存知だろうか？2007年ハバネロを抜いてギネス世界記録で「世界一辛い唐辛子」と認定された唐辛子だ（その後より辛い唐辛子がみづかり現在は世界三番目だが）。認定後はすぐに「激辛」としてメディアで話題になり、「ジョロキア」と冠するスナック菓子も販売された。ブートジョロキアやハバネロは植物学的には *Capsicum chinense* に属す。*Capsicum chinense* はアンデス山脈東側の低地を原産地とし、熱帯アメリカの幅広い地域、特にカリブ海やメキシコ南部からブラジル、ボリビアにかけてよく利用されている。ブートジョロキアはインドやバングラデシュ、ミャンマー（主にバングラデシュに隣接する州）で栽培されている品種なのだが、どこからやってきたのかよくわかっていない。ブートジョロキアの果実表面はざらざらしており非常に特徴的である。この系統群は中南米、特にカリブ海でよくみられるし、フィジーにも分布することを著者が確認している。カリブ海、南アジア、そしてフィジー。一体何の関係があるのだろうか？ぱっと思い浮かぶのはインド系移民だ。イギリス植民地時代にサトウキビ産業の担い手として多くのインド人契約労働者がフィジーに来島した。カリブ海にも旧イギリス領の島が存在し、現在でもインド系住民が居住している地域がある。この表面がざらざらした系統は、インド系住民によってカリブ海から直接あるいは間接的にインドやバングラデシュ、ミャンマー、フィジーへ導入された、と仮説を立てることはできないだろうか。東南アジア地域においてこの系統の分布が確認されていないことも、インド系住民のみの関与を示しているように思われる。この仮説、誰か証明してくれないかな。（山本宗立）

編集後記

この4月にセンターに赴任して編集を担当することになりました。これまでは自分の研究に関係ある人との付き合いがほとんどでしたが、このセンターでは幅広い分野の人達と交流できてとても刺激的です。客員教授の全先生は、みんなでお昼を食べるときに、毎日のように洗骨や首狩りの話をしていたとき、とても刺激的な昼食になりました。（大塚 靖）



研究会後の懇親会での全京秀教授

島嶼研だより No. 68 平成 26 年 10 月 31 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>